府中町ふるさと歴史散歩〔第3回〕

山田の牛祭り

中世・近世の府中地区の農業文化行事は、地形の関係であろうか、北部の山麓地帯を帯状に発展していったものと思われる。その一つに山田地区の牛祭りという行事がある。一日正月といって旧暦2月1日に行われ、その年の豊穣を祈念する予祝祭―豊年祭りのような収穫祭ではない―である。

細長に竹で編んだ籠に薄布をかぶせ、中に二人の人がはいる。一人は前足、一人は後足になるのである。頭は角のついた牛をかたちどって、伸縮がきくように同じく薄布で胴体に連り、浅い川の中を暴れ廻るのである。その後からは、蓑を着た牛追い、代掻き、柄振持と続くが、見物人は川の上から囃したてて声援を送る。見物人というのは、農閑期なので地元は勿論、近郷近在の親戚・友人・知人を招いて御馳走し、古老によれば、遠くは可部・加計・志和の方面からも泊りがけで来たという。近代に入ると一時衰退したときもあって、太平洋戦争中はなく、戦後は昭和24年春、地元青年会の手によって復活したという記録がある。以後は間歇的に行われて、今日に至っているのである。

現在行われている牛祭りは色とりどりの早乙女や、樽叩き等が加わって、華やかではあるが、胴体にくらべて、牛の足が長いので、グロテスクな感じがする。ところがこれが牛追いの手綱さばきで、一牛・二牛の二頭の牛が川の中に入るのを、道の上から見ると、人垣を田甫に見立てた生きた牛が、狂い廻るように見えるのであるから、長い間の庶民の深い工夫と知恵を発見して驚かされるのである。

最後に続くのは、苗を手にして、すげ笠をかむった樽叩きであるが、樽叩きは5～8本の荒縄で吊された樽を竹で叩いて、早乙女と音頭の調子を合わせるのである。早乙女の音頭で、現存するのは23番までであるが、現在では8番位までを選んで、繰返すようにしている。

ちなみに多家神社下の木陰に鎮まるおやしろは、牛祭りと深い関りをもつ山田稲生神社の本殿を明治末期に移設したものである。これは現在に残る有形の唯一のもので、貴船神社と呼ばれている。

久保　博
府中町文化財保護審議会委員

おぼろ苺は　朝草刈りの
エー　目さまし
笠は召せ召せ　召さねば
お色が　エー　黒うなる
今日は日盛り　手に持つ
苗は　エー　枯れるぞ

山田牛祭り

問い合わせ
教育委員会生涯学習課
☎286―3272